

二国間交流事業 セミナー報告書

令和5年3月23日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
国立大学法人京都大学・東南アジア地域研究研究所
[職・氏名]
教授・フィーナー マイケル
[課題番号]
JPJSBP 220229001

1. 事業名 相手国: シンガポール (振興会対応機関: NUS) とのセミナー

2. セミナー名

(和文) アジアにおける新たな海洋遺産の探求: トランスナショナルな概念的枠組み構築に向けて

(英文) Locating Maritime Heritage in Asia

3. 開催期間 2023年2月20日 ~ 2023年2月22日 (3日間)【延長前】 年 月 日 ~ 年 月 日 (日間)

4. 開催地(都市名)

シンガポール

5. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Lee Kuan Yew School of Public Policy, NUS, Assistant Professor, Marina Jose Kaneti6. 委託費総額(返還額を除く) 1,146,650 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または 日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	5名	5名
相手国側参加者等	12名	0名

参加者リスト(様式B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在費等を負担した場合、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を委託費で負担した場合に記入してください。

8. セミナーの概要・成果等

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載してください。関連行事(レセプション、見学(エクスカーション)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。各費目における増減が委託費総額の50%に相当する額を超える変更があった場合には、その変更理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。)

本セミナーの目的は、海域アジア諸国の文化遺産の記録・保存に携わる京都大学とシンガポール国立大学(NUS)の研究グループが参集し、「アジアにおける新たな海洋遺産の探求:トランスナショナルな概念的枠組みの構築に向けて」というテーマの下、最新のデジタル技術を駆使して「国家」や「博物館」という枠組みに捉われない海洋遺産の新たな保存、解釈、活用の在り方について議論することにある。セミナーは3日間にわたり行われ、当日は発表者とそれ以外の参加者を合わせて約80人の参加があった。また、2日目と3日目はハイブリッド方式で行ったため、約60人がZoomを通してセミナーに参加した。本セミナーは、海洋遺産をテーマとした会であることから、インド太平洋地域からの参加者も重視した。そのため、京都大学に拠点を置く海域アジア遺産プロジェクトのフィールドチームであるモルディブとインドネシアからメンバーを招待した。また、インド、上海、モーリシャスで調査を行なっている研究者も参加した。第三国からの参加者の招待費用は、二国間交流事業とは別に外部資金を獲得して賄った。

- (2) 学術的価値(セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

これまで、研究代表者レベルでの共著論文の刊行や学会参加を実施してきたものの、コロナ禍の影響もあり、研究メンバー間で包括的な議論を図る機会がなかった。このような経緯から、本セミナーでは、アジアの海洋遺産を巡る記憶の再構築を目的とし、学際的(政治、地理学、歴史、考古学、文化人類学など)かつ多様な(研究者、博物館関係者、遺産の記録に関わる実務者・技術者)メンバーを集結させ、遺産保護へのデジタル技術の活用、海域遺産をめぐる政治的言説や制度化、コミュニティによる遺産の保全・活用を課題として挙げ、知見の交換と好事例の共有を図った。具体的には、京都大学東南アジア地域研究研究所の海域アジア遺産調査プロジェクト、NUSアジア研究所のシンガポール歴史GISプロジェクト、NUSリー・クアンユー公共政策大学院のシルク・スパイス交易映像アーカイブプロジェクトから最新のデジタル技術を駆使したマッピングプロジェクトについての発表があり、遺産アーカイブの手法について新たな知見が得られた。また、文化人類学や社会学を専門とする研究者からは、記録する遺産をどのように選択し、収集したデータを具体的にどう活用するのか、という意見が挙げられ、活発な議論が交わされた。セミナーの最後には、今後の研究協力について話し合う時間が設けられ、NUS/アジア研究所を拠点に参加メンバーで連携して活動を行うという方向性で意見が一致した。これにより、今後、NUS・ARI・京都大学間で新たな海洋遺産の研究拠点形成につながることを期待される。

(3) 相手国との交流(両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果)

シンガポールは、東南アジアにおける考古学・博物館学の中心地であり、かつ海域アジア遺産調査が海外拠点を置く国でもある。同地域の海洋遺産を対象とするプロジェクトやアジア研究所から得た知見と京都を拠点とするMAHSの膨大なデータセット・技術力が結びつくことで、海洋遺産マネジメントの理論と実践の双方の発展を促進する大きな可能性が参加者の間で確認された。また、遺産言説とアイデンティティ生成の場の一つである博物館を訪問し、館長や学芸員らと交流することで、ナショナルレベルからコミュニティレベルまでさまざまな角度から幅広い意見を聞くことができたのは、大きな成果である。

(4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

本セミナーを通じて、まず、学術的観点からアジアの海洋遺産を保存しすることの意味・価値を検証し、最新のデジタル技術を活用した新たな保存、展示、活用の方法を提示することができた。また、編著の出版だけでなく、本セミナーで作成された動画をウェブサイトやソーシャルメディア上で発信することで、より多くの人に成果が届けられると考える。次に、これまで博物館学や文化遺産の分野では学术交流が希薄であったシンガポールと日本の関係を強化できた点が挙げられる。海洋遺産に関する議論を通して、東南アジア全域において2ヵ国が主軸となり、今後、AIを含むデジタル技術の活用を含め、先導的役割を果たしていくことが期待される。最後に、これまで現地の人々と連携し、長期継続的な調査を行ってきた経験やセミナーを通じて得られた知見を活用し、海洋遺産保護に貢献し得る文化施策への提言や実践的な方策の提案が可能となる。大学が研究の場として学問における真理追求にだけ終わるのではなく、社会が必要とするものを提供することによって、研究と実践の橋渡しをすることができると考える。

(5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本セミナーでは、若手研究者が発表し、貴重な研究発表の場になったほか、セミナーの企画・運営には、日本側の若手研究者である池田が積極的に関わっており、学会運営の経験の向上や人的ネットワークを拡げる良い機会となった。若手研究者は、当初静かで遠慮がちであったが、徐々に雰囲気慣れすると、活発に意見を述べるようになったり、自分の研究と関係のある研究者に話しかけ、今後の研究について意見交換をしたりするなどの積極性が見られた。以上のことから、本セミナーは、若手研究者にとって貴重な研究発表の場になると同時に、研究者間の国際的なネットワークを拡げることにつながったと考える。

(6) 将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

今後の研究協力に関するセッションがセミナー最終日に行われた。そこではデジタル・ヒューマニティーズや無形遺産とコミュニティなど地域横断的なテーマが挙げられ、今後の共同研究の方向性について話し合われた。また、ARI/NUS 内に文化遺産をテーマとした研究クラスターや研究所の設置などの意見も出され、研究を総合的に支える体制を構築しようとする動きも見られた。具体的な内容については話し合いを重ねていく必要があるものの、今後も参加者同士で連携して一つの研究を進めるという点において、意見が一致した。

(7) その他(上記(2)～(6) 以外に得られた成果(論文発表等含む)があれば記載してください)

本セミナーの開催前、開催中に海域遺産をテーマにした参加者インタビューを行い、ドキュメンタリー映像を作成した。インタビュー映像は、各プロジェクトのウェブサイトやソーシャルメディアのプラットフォームにアップロードし、4月頃に公開される予定である。また、NUS図書館に新設された「イマジナリウム」という施設を利用して、MAHSが作成した3Dモデルやシルク・スパイス交易映像アーカイブプロジェクトが撮影したフィールドワークの調査風景を投影し、他の参加者と活動を視覚的に共有することができたのは大きな成果である。